

『公衆の誕生、文学の出現―ルソー的経験と現代』

水林章著

みすず書房 二〇〇三年四月

『幸福への意志』、『ドン・ジュアンの埋葬』につづく本書『公衆の誕生、文学の出現―ルソー的経験と現代』を読む者がまず経験するのは、テキストの快楽ということだろう。さながらオペラの序曲のような雰囲気と味わいをもつ『幸福への意志』のプロローグ「モーツアルトのいる風景」をはじめ読んで読んだときの驚きと快感を、私はいまでも思い出す。この著者のエクリチュールにはいつも、きわめて厳密な学術性にくわえて、フランス語で *suave* と言いたくなるほどの甘美さ、心地よさがあるのだ。この独特の味わいはどこからくるものなのだろうか。

水林章の日本語の文章はそのままフランス語に翻訳しても、いささかも不自然さが生じないものと断言できるが、これは自然科学の論文ならともかく、文学を対象としたテキストではごくまれなことである。私たちが文章を書くとき、大体は日本語の内部でしか意味をもたない様々な暗黙の前提、自動的な機能にそれと意識することさえなく依拠しているもののに、彼の場合はそんな傾向がほとんど見られないのだ。では彼の散文が日本語の様々な暗黙の前提、自動的な機能などに頓着しない外国人の文章、あるいは科学者の書いた

論文に近いかというと、かならずしもそうではない。フランス語という異質の言語空間を全的に通過することではじめて発見される日本語の新鮮なニュアンスがじつに繊細に掬い出されていること、いわば濾過され再発見された日本語の散文、そこにこそ私が *suave* と言いたくなる彼の文章独特の瑞々しい魅力が由来するのだろう。さらにもうひとつ重要な要素がこれにくわわる。エクリチュールの音楽性がそれである。なによりも一字一句はもとより、句読点ひとつにも細心の注意が払われている文章のリズム、そして展開の仕方にもその音楽的な感性が秘かにうかがわれるのだ。この音楽性が彼のテキストを多くの学術論文と画然と区別するものであると同時に、とりわけ本書が主題的に論じているジャン・ジャック・ルソーの『告白』『ルソー、ジャン・ジャックを裁く―対話』のようなテキストに参入するためには、おそらく不可欠な資質なのである。

ルソーの『社会契約論』が中江兆民によって『民約約解』の題名で翻訳され、明治の自由民権運動に大きな影響をあたえたことはだれでも知っているが、子供たちが幼稚園で歌う童謡「結んでひらいて、またひらいて結んで・・・」のメロディーが『社会契約論』の作者によって作曲されたものであることを、はたしてどれだけの人が思い出すだろうか。だが、フランス文学史上屈指の名文家であるルソーはオペラ作品『村の占い師』が宮廷で上演されたほどの作曲家であって、彼は社会思想家であるまえに文学者であり、文学者であるまえに、とまでは言わないにしろ、すくなくとも文学者であると同時に音楽家であった。だから、ルソーのテキストを読むには音楽的な感性が是非必要になるのだが、わが国有数のフランス語の使

い手であると同時に稀代のメロマニアである水林——このことは本書でも随所にうかがわれる——は、この意味で理想に近いルソーの読み手でもあるとも指摘しておこう。

『幸福への意志』から本書までの水林章の研究および論述の方法、スタイルはまた、厳密なテキスト批評と歴史社会学を結合させる意志によつても一貫している。テキストというミクロコスモスにいかにか社会、時代といったマクロコスモスが反映され、表象されているか——著者の好きな言葉で言えば、「打刻されて」いるか——を精緻、細心に読みとることをめざすのだ。そしてこの方法の急所は、いうまでもなく、分析すべきテキストをどのように選び、その語彙を吟味し、文体特徴を見極めるかにある。これがおろそかにされれば、どんなにすぐれた歴史社会学の見解であつても、たんなる思弁的な言説に終わってしまうだろう。ところが彼の場合、そのテキストの選択および分析の手際がほとんどジャン・スタロヴァンスキー並みに見事なのである。ここではその細部には立ち入らないが、さきに私が言った「テキストの快楽」のなかには、むろんそのことも含まれている。

本書のキーワードは題名にもあるとおり、公衆 public である。だが、そもそもフランス語の public は公衆の意味をもっていなかった。一六世紀まではもっぱら国家 *res publica* のパラダイムに属す意味を担っていたのだが、一七世紀の絶対王政の確立とともに「文芸の国家」の意味に、そして一八世紀の市民社会の成熟とともに、逆に国家や君主権に対抗する「公衆」の意味に転化するにいたった。これが公衆の歴史的な誕生である。このことを著者は各種の辞書はもと

より、モンテーニュからデカルトを経て、ヴォルテールにいたるまでの厳密な文献学的考証によつて明らかにする。だが、一八世紀の啓蒙主義の時代に生まれた公衆 public は、一九世紀以降資本制市場経済の圧倒的な展開とともに、誕生の当初にもついていた批判的理性を有する公衆が対等な言説をぶつけ合うといった公共性の枠を突き破り、次第に文化や文学をひたすら個人的な消費の対象にして疑わない「大衆」なつていく。むろん、私たちは久しくそんな時代を生きているのだ。たとえば public から派生した *publicité* 言えば、いまや公開性ではなく、もっぱら広告の意味でのみつかわれる。批判的理性をもち、ときには国家や君主権に対抗さえする公衆の黎明期に、のちの時代になつて次第に露わになつてくるそんな public の両義性、危険性をいち早く敏感に察知したのは、ほかでもなくジャン・ジャック・ルソーだった。

本書の題名『公衆の誕生、文学の出現——ルソーの経験と現代』にもう一度注意してみよう。裏表紙にはこれとは別にフランス語の題名が書かれており、それを直訳すれば、「専制的な言語の彼方に——公論の時代における文学の出現、ルソーの経験」となる。これは水林章の仕事のもうひとつの特質だが、彼の研究はつねに現在の関心から出発して、専門領域であるフランス一七世紀、あるいは一八世紀のテキスト批評に遡り、歴史社会学の考察をくわえることである。いわばミシェル・フーコーの意味における現代という時代の考古学、これがおそらく彼のめざすところなのだろう。ところで、著者の言うとおり、私たちの「現代」とはもっぱら商品価値を基準とする「専制的な言語」がマスメディアをとおして支配する時代である。「わ

たしたちは、言うまでもなく、すべてがもつとも単純な貨幣の言語によつて植民地化された世界の悲しい住人である」と彼も断定している。そしてこうつづける。「しかし、わたしたちを奴隷のようにつなぎとめている世界のヘゲモニーを問題化し、わたしたちの疑似植民地人としての悲惨を消費の快楽のなかに埋もれされない反言語的な営みがあるとすれば、それこそがおそらく〈文学〉というものであろう。わたしは、圧倒的な勢いで流通する画一化された言語のなかに、それに抗してもうひとつの言語を叩きあげる密猟的な言語活動―それを人は「詩的な」と形容するだろうか―に一筋の希望を見出す人々に共感を抱く。わたしたちは自分の声を探し求める旅に出立しなければならぬのだらう。広大な社会空間をぼつたり埋め尽くした公衆の言説Ⅱ他者の言説の運搬者であり、またその効果にすぎなかった〈フランス人〉にみずからの言葉を見出させ、もつて「三重の壁からなる闇」のなかから、そのなかでほとんど死滅しかかっていたおのれの声を救い出すことに成功したジャンⅡジャック・ルソーにならつて」。

ジャンⅡジャック・ルソーがほとんど正気の沙汰とも思えないくらい徹底的に「公衆」を疑い、ほぼ完全な孤立無援の状態でラディカルに「公論」と闘った様は、本書では『告白』のテキストの胸のすくような読解を中心にあますところなく描出されている。また、前述のように「公衆の誕生」の歴史的・文献学的考証も間然するところがない。だが、私たちがもつとも期待に胸をふくらませずにはおれない「文学の出現」のほうはどうだろうか。引用文でも言及されているように、この「公論の時代における文学の出現」は『ルソ

ー、ジャンⅡジャックを裁く―対話』の精緻なテキスト分析によつて見定められようとしている。本書Ⅲ「言語の専制の彼方へ―対話」における公衆と公論」、とくにその終わりの数十頁がそれに該当する。ルソー研究者がこの『対話』を正面から取り上げることがそもそも稀なことだったらしいが、彼は「公衆の誕生」という歴史的文脈を明らかにすることで、ようやくこの奇書にアプローチする視点を獲得したようだ。そして〈ヘルソー〉と公衆の言説Ⅱ他者の言説の運搬者であり、またその効果にすぎなかった〈フランス人〉との対話を克明にたどり、「第一の対話」の後半から、「第二の対話」を経て「第三の対話」にいたつて、他者の言説の囚人だった〈フランス人〉が〈ジャンⅡジャック〉のテキストをみずから読んでみるという「直接的Ⅱ無媒介的な経験」によつて、ついに「公衆」から最終的に離脱する様に着目し、その結果として〈ヘルソー〉、〈フランス人〉、そして〈ジャンⅡジャック〉の三者がそれぞれに「反言説の主体」となり、「専制的な言語の彼方」に「精神の共同体」を形成しようとしているかに見える成り行きに「文学の言葉」の「劇的な誕生」を読みとろうとしている。

「公衆の誕生」と並べて「文学の出現」というには、あまりに非対称的、エレジー的、「密猟的」でないか、と感じる読者もいるだろう。じつは私自身もそんな感じがしないでもない。だが、よくよく考えてみれば、公衆といつても一八世紀のそれはまだそれなりに批判的理性をもち、しかも「読書する公衆」の側面を具えていた。これに反して現代の公衆はといえば、著者によつて「すべてがもつとも単純な貨幣の言語によつて植民地化」され、「疑似植民地人」と

しての悲惨を消費の快楽のなかに埋もれさせている」公衆だと「観念」されているばかりか、あまり「読書」をしない公衆でもある。してみれば、「ルソー的経験と現代」という問題をまともに見つめようとすれば、たとえ著者がいくら「臓腑の底から苛立ち」を覚えても、「文学、存在の故郷」といういくぶんハイデガー的な響きも感じられる「反言説」を、どうしてもただ小声でしか口にできないのではないか。どうしても「孤独な夢想者」の顔つきで、低く呟いてみるほかないのではないか。それゆえに私のように「文学の出現」の一言に期待の胸をふくらませた読者は、そんな「密猟的」な呼びかけの声に共感を覚えつつ、本書で予告されているように思われる水林章の『孤独な夢想者の散歩』論に、「一筋の希望」をつなぐべきなのだろう。

(西永良成)